



Title	過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響-成功・失敗経験の多様な意味-
Author(s)	尾崎, 仁美; 上野, 淳子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2001, 27, p. 63-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響
成功・失敗経験の多様な意味

尾 崎 仁 美
上 野 淳 子

目 次

- 1．問題と目的
- 2．方 法
- 3．結果と考察
- 4．全体的考察

過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響 成功・失敗経験の多様な意味

尾崎 仁美
上野 淳子

1．問題と目的

われわれは、人生においてさまざまな出来事を経験するが、それらは後の人生にどのような影響を及ぼすのであろうか。

過去に起こった出来事が、個人の現在に大きな影響を及ぼすことは、ライフイベントを中心とした研究によって明らかにされている。ライフイベント研究では、個人にとってストレッサーになると考えられる生活上の出来事(life events)を測定する試みがなされ、身体的・精神的健康との関連が検討されてきた(Holmes & Rahe, 1967; Sarason, Johnson, & Siegel, 1978; Crandall, Preisler, & Aussprung, 1992)。わが国においても、大学生を対象としてライフイベントを測定するためにさまざまな尺度が開発され(久田・丹羽, 1990; 尾関, 1990; 1993; 和田・鄭・郭, 1993)、ストレスの予測が試みられている。これらの尺度では、「学業」「友人」「家族」「クラブ・サークル活動」など、大学生の中心的な生活領域に対して、どの学生にとっても体験可能で、ある程度の衝撃をもつ出来事(「学業上のことで失敗した」「信頼していた友人・先輩などに裏切られた」など)が項目として設定されている(久田・丹羽, 1990)。そして、これらの出来事について、過去一定期間内における体験の有無やそれに伴う快・不快感(「何ともなかった」～「非常に楽しかった/つらかった」など)について、現在から過去を振り返る形で評定を求め、それらを合計することによって、個人が過去に経験したストレッサーの量が算出されるのである。これらの研究では、過去のネガティブイベントの体験数やその不快感から現在のストレス度を予測することが目的とされており、実際、こうして捉えられたネガティブなストレッサーは、抑うつや不安、身体的疲労感など、現在のストレス反応との間に強い関連がみられることが報告されている(尾関・原口・津田, 1991; 1994)。一方、ポジティブなライフイベントについては、わが国ではそれほど重点的に測定が試みられているわけではなく、精神的健康との間に明確な関連は得られなかったという指摘もある(久田・丹羽, 1990; 尾関, 1990)。しかし、ポジティブ項目を積極的に採り入れた高比良(1998)の研究では、ポジティブイベントの経験数と自尊心や抑うつと有意な関連がみられることが報告されている。

このように、これまでのライフイベント研究では、過去の経験は現在のストレス反応を予測する要因として扱われてきたのであり、過去のネガティブな経験は個人にマイナスの影響をもたらし、過去のポジティブな経験は個人にプラスの影響をもたらすという直線的関係が前提とされてきたように思われる。しかし、その一方で、多様な研究領域において、両者の関連がそれほど一様でないことを示唆する見解が得られている。

たとえば、就職活動や個人の将来について考えることは、わが国の大学生用ライフイベント尺度に含まれている項目でもあり、場合によっては、かなりのストレスを伴う経験であると考えられるが、高村(1997)や 浦上(1996)では、就職活動を通じて、自己理解の深化やアイデンティティの変容、自己成長感の獲得など、個人にポジティブな変化をもたらす場合のあることが報告されている。また、Marcia(1966; 1967)による自我同一性研究でも、青年期において自分の人生に迷い苦悶するような危機的経験は、自我同一性の達成においてむしろ積極的に位置づけられており、同じように人生の重要な領域に対する積極的関与(commitment)ができていても、危機を経験していない場合は早期完了(Foreclosure)として、危機を経験した同一性達成(Achievement)とは区別される。このように、ある時点ではネガティブだと判断されるストレスフルな出来事であっても、時間の経過とともに、ポジティブな形で個人に影響をもたらす場合もある。カウンセリングの過程において、自己の欠点や過去のネガティブな出来事に対する捉え方が個人の中で変化することは、しばしば報告されることである(Rogers, 1951)。

ライフイベント研究では、現在から過去を振り返り、それぞれの出来事について評定を求める方法が用いられているが、そこでは、上述したような過去から現在への意味づけの変化や多様性は考慮されていなかったのではないだろうか。つまり、過去のポジティブな経験は個人にプラスの影響をもたらし、ネガティブな経験はマイナスの影響をもたらす傾向がみられるとはいえ、実際には個人によって多様な意味づけが行われており、過去のネガティブな経験が現在や未来にプラスの意味をもつ場合や、過去のポジティブな経験が現在や未来にマイナスの意味をもつ場合があるであろうし、一つの経験がプラスであると同時にマイナスでもある、という受けとめ方がなされている場合もあるであろう。過去の経験がもたらす現在への影響を検討する上では、ポジティブ・ネガティブな出来事の体験数やその出来事の重みづけのみではなく、現在、個人がそれらの経験をどのように受けとめているか、という出来事に対する個人の捉え方を考慮する必要があるように思われる。

従来の研究において、過去の経験が、個人の人生においてどのような意味をもつかについて、その内容を具体的に検討したものはほとんどみあたらない。また、ストレス研究では、ネガティブ経験がどうプラスに転じるか、ということは検討されているものの、ポジティブ経験がもつマイナスの影響については言及されてこなかった。

そこで、本研究では、過去の経験が個人の人生にもたらす影響について、このような多様な意味を考慮しながら両者の関係について検討する。その際、そうした経験が個人に

にとって意味あると認識されているかどうかとも考慮されるべきであろう。従来のライフイベント研究では、大学生にとって中心的だとされる生活領域が設定されるだけで、その領域の意味が考慮されることはほとんどなかったが、例えば、同じ学業領域のストレスを経験したとしても、学業を生活の中心と位置づける大学生と学業にそれほど重きを置いていない大学生とでは、現在の個人に与える影響は大きく異なるであろう。実際、他者との相互作用に対して敏感な「対人志向性 (sociotropy)」の高い人は、対人関連のネガティブなライフイベントを経験したときのみ抑うつが悪化を示し (Lakey & Ross, 1994; Robins & Block, 1988)、目標の達成などに対して敏感な「自律性 (autonomy)」の高い人では、達成関連のネガティブなライフイベントを経験したときのみ抑うつが悪化を示す (Segal, Shaw, Vella, & Katz, 1992) など、領域やその意味づけを考慮する必要性を示唆する報告もなされている。

そこで、本研究では、個人が過去に達成を志向していた目標を自由記述によってまず捉え、それに対する成功・失敗経験を扱うことにした。自由記述を用いたのは、被調査者に自由に表出させることによって得られた領域は、個人にとって比較的意識度・関心度の高いものであるため (平川 (上野)・尾崎, 2000)、この方法によって自我関与度の高いポジティブ・ネガティブ経験を扱うことができると考えたためである。こうして捉えられた成功・失敗経験は、受け身的に生じた出来事ではなく、個人が能動的に取り組んだ出来事であるから、それらは、個人にとって意味ある経験として位置づけられると考えられる。そのようにして得られた経験が個人の現在や未来にもたらす影響について、プラス・マイナス両面を考慮に入れながら、過去の経験が個人にもたらす影響の多様性を示したい。

2. 方 法

質問紙による調査を実施した。調査対象者、調査時期、調査内容は以下の通りである。

被調査者：大学生475名 (男127名/女347名/不明1名)。平均年齢は19.17歳であった。

調査時期：1999年10月～11月。

調査内容：個人の成功・失敗経験を捉えるため、過去に達成を目指していた目標についてまず尋ね、その後、その達成度を問う方法を用いた¹⁾。さらに、その経験が現在や未来にもたらす影響について、評価と自由記述を併せて尋ねた。具体的内容は以下の通りである。(1)から(4)までの質問が3回繰り返され、被調査者は目標を最大3つまで表出できる。

(1) 目標

「あなたは、過去に何か目指していたこと、目標をもって頑張っていたことがありますか。どんなことでも結構ですので、思い出したものを1つ下の空欄に書いて下さい」と、目標の自由記述を求めた。

(2) 目標の達成・不達成

(1)で記述された目標が達成できたかどうかについて、「達成できた」「ある程度達成できた」「あまり達成できなかった」「達成できなかった」の4件法で回答を求めた。

(3) 現在への影響

(a)影響の有無 「(1)の目標が達成できた(あるいはできなかった)ことは現在のあなたに何か影響を与えていますか」という教示のもと、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。

(b)影響の内容 (a)で「はい」と回答した者に対しては、それがどのような影響か、プラス面・マイナス面両方について自由記述で回答を求めた。

(c)影響に対する評価 (b)のことが総合的にみて自分にとってプラスの影響かマイナスの影響かについて、「プラス」「どちらかといえばプラス」「どちらともいえない」「どちらかといえばマイナス」「マイナス」の5件法で回答を求めた。

(4) 未来への影響

(a)影響の有無 「(1)の目標が達成できた(あるいはできなかった)ことはあなたの将来に何か影響を与えていますか」という教示のもと、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。

(b)影響の内容 (1)で「はい」と回答した者に対しては、それがどのような影響か、プラス面・マイナス面両方について自由記述で回答を求めた。

(c)影響に対する評価 (b)のことが総合的にみて自分の将来にとってプラスの影響かマイナスの影響かについて、「プラス」「どちらかといえばプラス」「どちらともいえない」「どちらかといえばマイナス」「マイナス」の5件法で回答を求めた。

3 . 結果と考察

3-1 . 挙げられた目標の内容分類

得られた全目標数は860個であり、一人あたりの平均目標数は、1.8個であった。目標の内容を分類したものを、Table 1 に示す。最も多く挙げられたのは、受験や定期テストといった「学業」領域に含まれる目標であり、次に多くみられたのは、野球やサッカーなどの「スポーツ」領域に含まれる目標であった。その他、「職業」「音楽」「部活」「自分自身を磨くこと(外見・内面)」「学校行事」など、多様な領域の目標が挙げられていたが、大学生を対象とした同様の調査(上野, 2001)においても、上位2項目は学業とスポーツであったことから、これら2領域は、大学生の多くが達成を志向した経験をもつ領域として捉えられる。

Table 1 : 目標のカテゴリーと出現率

カテゴリー名(記述例)	カテゴリー数 860個中(%)	人数 475人中(%)
学業(受験・定期テストなど)	342(39.8)	311(65.5)
スポーツ(野球・サッカーなど)	156(18.1)	149(31.4)
職業(学校の先生・医者など)	134(15.6)	108(22.7)
音楽(ピアノ・バイオリンなど)	54(6.3)	52(10.9)
部活(内容は不明)	46(5.3)	46(9.7)
外見を磨く(ダイエット・おしゃれなど)	24(2.8)	24(5.1)
書道	15(1.7)	15(3.2)
学校行事(文化祭・体育祭など)	12(1.4)	11(2.3)
恋愛	9(1.0)	9(1.9)
内面を磨く(劣等感をなくすなど)	8(0.9)	8(1.7)
資格・免許	7(0.8)	7(1.5)
そろばん	6(0.7)	6(1.3)
お金をためる	6(0.7)	6(1.3)
将来の生活様式(外国に住むなど)	6(0.7)	5(1.1)
皆勤	5(0.6)	5(1.1)
読書	4(0.5)	4(0.8)
その他(健康・人間関係・バイトなど)	26(3.0)	25(5.3)

注1) カテゴリーの内容がわかりにくいと思われるものについては、()内にその記述例を示した。

注2) カテゴリー数は、挙げられたカテゴリーの個数、人数はそのカテゴリーを挙げた人数を示す。

3-2. 目標達成における成功・失敗経験と現在・未来への影響との関係

(1) 目標達成における成功・失敗の程度と現在・未来への影響の評価との関係

3-1.で挙げられた目標に対する成功・失敗の程度と現在・未来への影響評価との関係を検討するため、両者の相関係数を算出した(Table 2)。現在・未来への影響は、各目標に対して評定されているため、ここでは挙げられた全目標860個を対象としたが、一人が複数の目標を挙げている場合があることを考慮し、一人あたり1個の目標をランダム抽出し、同様の相関係数を算出したところ、Table 3のようになった。

いずれにおいても、相関係数に大きな違いはみられず、現在・未来への影響ともに正の有意な相関がみられていた。すなわち、目標達成に成功できていれば現在や未来にプラスの影響があり、逆に、失敗していれば、現在や未来にマイナスの影響があると認知される傾向が示された。

次に、両者の関係をより詳細に検討するため、度数による分析を試みた。現在や未来

Table 2 : 成功・失敗の程度と現在・未来への影響との相関

	現在への 影響評価	未来への 影響評価
成功・失敗の程度	470***	465***

***P < .001

Table 3 : 成功・失敗の程度と現在・未来への影響との相関(1人1個の目標を抽出)

	現在への 影響評価	未来への 影響評価
成功・失敗の程度	501***	449***

***P < .001

への影響に対する総合的評価を、「プラス（プラス＋どちらかといえばプラス）」「どちらとも言えない」「マイナス（マイナス＋どちらかといえばマイナス）」の3群に分類し、目標達成の程度別にその度数を算出した（Figure 1 ,Figure 2 ）²⁾。相関係数に示された通り、目標の達成に成功しているほど現在や未来に対するプラスの影響は増加していくことが示されているが、注目すべき点は、たとえ目標の達成に失敗した場合であっても、現在や未来にプラスの影響をもつ場合が、決して少なくない数で見られることである。

(2) 現在・未来への影響の評価とプラス面・マイナス面それぞれの記述の有無

現在や未来への影響に関する総合的評価と、プラス面・マイナス面それぞれの記述との関係を検討するため、現在・未来への影響の評価別にプラス面・マイナス面それぞれの記述の有無を確認した（Figure 3 ,Figure 4 ）。その結果、現在や未来への影響が総合的にプラスと評価された場合であってもマイナスの記述がみられ、逆に、現在や未来への影響が総合的にマイナスと評価された場合であってもプラスの記述がみられることが明らかになった。

以上のことから、目標達成に成功していても現在や未来にマイナスの影響がみられたり、失敗していてもプラスの影響がみられる場合があるなど、目標達成の成功・失敗と現在や未来への影響との関係はそれほど単純なものではないことが示された。また、現在や未来に対する影響が総合的にプラスと

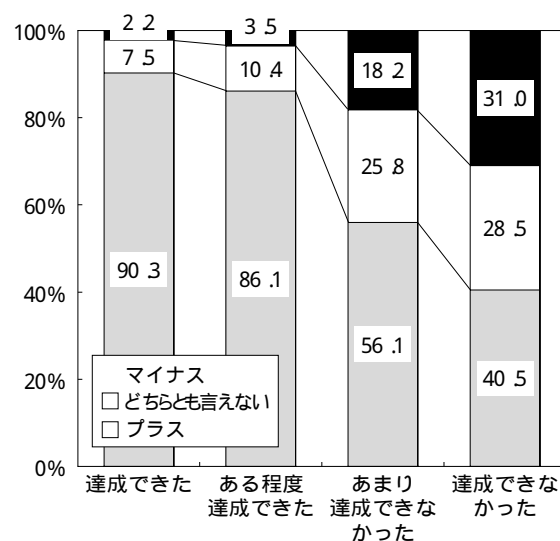


Figure 1 : 成功・失敗の程度と現在への影響の評価

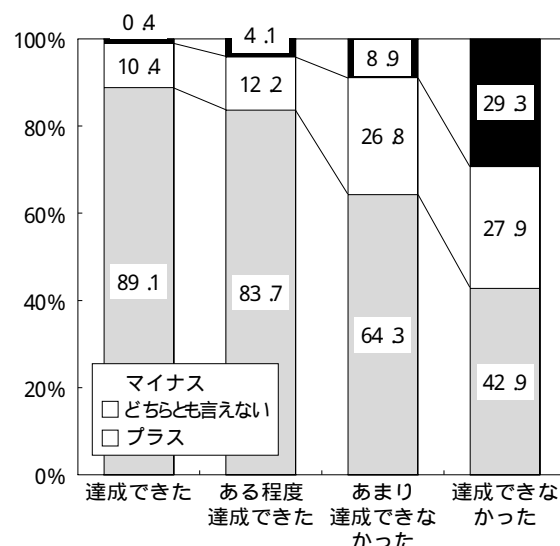


Figure 2 : 成功・失敗の程度と未来への影響の評価

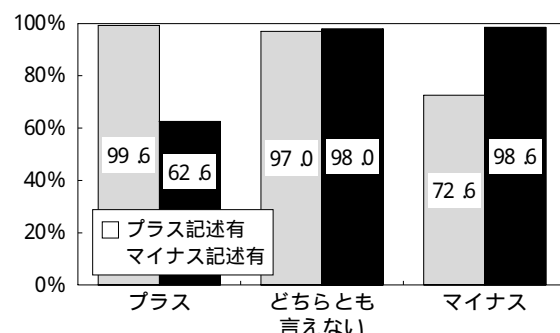


Figure 3 : 現在への影響の評価とプラス記述・マイナス記述の有無

評価されていても、マイナス面の記述がみられていたり、総合的にマイナスと評価されていてもプラスの記述がみられるなど、そこには、単なるプラス・マイナスどちらか一方のみでは捉えきれない多様な意味が存在することも示唆された。

そこで以下では、過去の目標達成における成功・失敗経験が個人の現在や未来にもたらす影響について、さらに詳細に検討するため、質的側面の検討を試みる。ただし、その内容は各目標領域に固有のものであると考えられるため、以下では、目標の領域を限定して内容を検討する。その際、度数を考慮して、最も多く挙げられた学業とスポーツのみを分析対象とした。前述したように、これらの領域は、先行研究においても大学生の多くが達成を志向していたことから、分析対象としても妥当であろう。

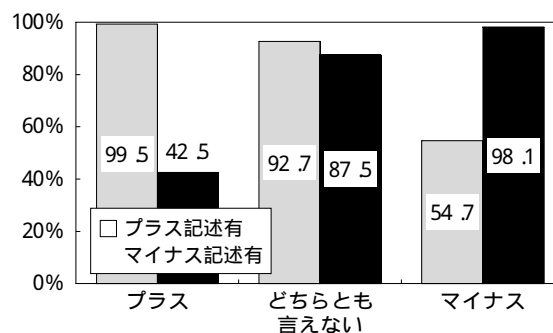


Figure 4：未来への影響の評価とプラス記述・マイナス記述の有無

3.3．現在・未来への影響に関する記述のカテゴリー分類

現在・未来への影響に関する記述に基づいて、プラスの影響とマイナスの影響それぞれ

Table 4：現在への影響に関する記述のカテゴリー

プラスの上位カテゴリー	プラスの下位カテゴリー	マイナスの上位カテゴリー	マイナスの下位カテゴリー
現在の環境	いい結果を得ることができた 今の生活が楽しい 金銭面で安くついた 現在の生活環境がよい	現在の環境	現在の生活環境がよくない
人との関わり	人とのよい出会いがあった 周囲の人のありがたみが分かった 周囲の人から評価されるようになった 周囲の人とよい関係を築けた 周囲の人への態度や気持ちがよい方に変変わった	人との関わり	周囲の人からネガティブな評価を受ける 周囲の人との関係にネガティブな影響があった 周囲の人への態度や気持ちが悪い方に変変わった
内面の変化	自信がついた 努力の意義を知った 達成感が得られた 忍耐・努力する力がついた 精神的に楽になれた 性格・考え方がよい方に変変わった 新しいことを経験できた・学べた 今の自分の土台になっている スポーツやその競技が好きになった 能力の限界・現実の厳しさを知る事ができた やる気がでた いい思い出ができた	内面の変化	怠惰になった 目標達成後の充実感がない 過剰な自信をもつことになった 辛い時に逃げる癖がついた なかなか自立できない ネガティブな努力観をもってしまった 性格・考え方が悪い方に変変わった 自信がなくなった・劣等感がある やる気・努力しようという意欲がなくなった 挫折感・辛い気持ちを味わった
身体面の変化	体力・運動能力が向上した	身体面の変化	身体・体型の変化 身体を壊した・怪我をした
将来・目標	自分や将来について考える機会が得られた 将来の夢に近づけた 新しい目標・興味あることが見つかった	将来・目標	将来への不安がある 目標を見失った
その他	マイナスはあるがプラスはない	過去へのこだわり	他の生き方や可能性があったかもしれない 目標達成のために犠牲にしたものがある やり残した事・やりたかった事への未練がある 今でも悔いが残っている
		その他	プラスはあるがマイナスはない

Table 5：未来への影響に関する記述のカテゴリー

プラスの 上位カテゴリー	プラスの下位カテゴリー	マイナスの 上位カテゴリー	マイナスの下位カテゴリー
現在の環境	現在のよい環境が得られた	現在の環境	現在の環境に不満がある
人との関わり	周囲の人とのよい関係を続けている 周囲の人への態度や気持ちがよく方に変わった 人とのよい出会いがあった 様々な人に会える	人との関わり	周囲の人からネガティブな評価を受ける 対人関係に不安がある
内面の变化	新しいことを経験できた・学べた 忍耐・努力する力がついた 自信がついた 努力の意義を知った 性格・考え方がよい方に変わった やる気がでた いい思い出ができた	内面の变化	過剰な自信を持つようになった やる気・努力しようという意欲がなくなった 自信がなくなった・劣等感がある 目標達成後の状態に不満がある 性格・考え方が悪い方に変わった
身体面の変化	健康・体力を得た	身体面の変化	身体・体型の変化 身体の不調・けが・身の危険
将来の進路	就職に有利に働く 将来の見通しができた 将来の夢に近づけた 学歴・資格を得ることができた 将来の選択の幅が広がった 将来のための準備・役に立つ経験ができる 新しい目標・興味あることが見つかった	将来の進路	将来の進路に不安がある 夢をあきらめ方向転換をしなければならない
将来の生活	これから新たなことが学べる・経験できる これからも続けていける趣味ができた 将来楽しい生活ができる	将来の自分への不安	人の意見に流された生き方をしそう 新たな目標の達成に不安がある 自分の未熟さに対する不安がある
その他	マイナスはあるがプラスはない	過去へのこだわり	他の生き方や可能性があったかもしれない 辛い思い出ができた やり残した事・やりたかった事への未練がある
		その他	プラスはあるがマイナスはない

れの内容を分類し、Table 4、Table 5 のカテゴリーを設定した。筆者らを含む 3 人の心理学を専攻する者でカテゴライズを行い、1 人でも一致しなかった記述については協議をした。その結果、得られた下位カテゴリーの一致率は、現在に対するプラスの影響については 91.1%、マイナスの影響については 88.6%、未来に対するプラスの影響については 93.6%、マイナスの影響については 94.1% であった。

3-4．学業領域とスポーツ領域における成功・失敗経験が現在・未来にもたらす影響

(1) 学業領域における成功・失敗経験が現在・未来にもたらす影響

過去に目指していた目標の中で、学業領域の目標を挙げた者を抽出し、その目標について「達成できた」「ある程度達成できた」と回答した者を成功(LS)群、「達成できなかった」「あまり達成できなかった」と回答した者を失敗(LF)群とした³⁾。

(a) 現在への影響

学業領域における成功・失敗経験がもつ現在への影響の有無について群別に度数を算出したところ、両群ともにほとんどの者が「影響あり」と回答していた (Table 6)。また、現在への影響に関する総合的評価について、群別にその度数を算出したところ、LS 群ではほとんどの者が総合的にプラスと評価していたが、LF 群においてもプラス評価が多数みられることが明らかになった (Figure 5)。

次に、学業領域における成功・失敗経験が現在に及ぼす影響の内容を検討するため、Table 6 において「影響あり」と回答した者のうち、成功・失敗群別に 3-3 で設定さ

Table 6 : LS/LF 群における現在への影響の有無

	LS 群	LF 群
影響あり	201 (94.4)	71 (80.7)
影響なし	12 (5.6)	17 (19.3)
合計	213 (100.0)	88 (100.0)

カッコ内は%

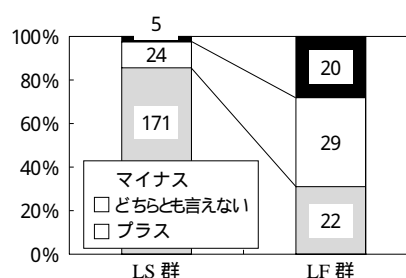


Figure 5 : LS/LF 群における現在への影響の評価(数値は人数)

Table 7 : LS/LF 群における現在への影響(上位カテゴリー)

プラスの 上位カテゴリー	LS 群 201人中(%)	LF 群 71人中(%)	マイナスの 上位カテゴリー	LS 群 201人中(%)	LF 群 71人中(%)
現在の環境	75 (37.3)	22 (31.0)	現在の環境	23 (11.4)	10 (14.1)
人との関わり	45 (22.4)	18 (25.4)	人との関わり	12 (6.0)	4 (5.6)
内面の変化	129 (64.2)	30 (42.3)	内面の変化	74 (36.8)	27 (38.0)
身体面の変化	0 (0.0)	0 (0.0)	身体面の変化	1 (0.5)	0 (0.0)
将来・目標	26 (12.9)	9 (12.7)	将来・目標	6 (3.0)	9 (12.7)
			過去へのこだわり	28 (13.9)	26 (36.6)
その他	0 (0.0)	1 (1.4)	その他	3 (1.5)	1 (1.4)
マイナスはあるがプラスはない	0 (0.0)	8 (11.3)	プラスはあるがマイナスはない	58 (28.9)	5 (7.0)

れた上位カテゴリーの出現率を算出した (Table 7)。

現在に対するプラスの影響については、両群ともに「内面の変化」を挙げた者が最も多く、次いで多くみられたのは、「現在の環境」「人との関わり」であった。現在の環境が多くみられるのは、学業領域の目標として挙げられた内容のほとんどが大学入試であったことが影響しているように思われる。学業達成に失敗したことがマイナスの影響しかもたない者が11.3%みられるが、それ以上に、多様な側面においてプラスの影響がみられることが示された。

現在に対するマイナスの影響については、LS 群では、「内面の変化」が最も多く、次いで「プラスはあるがマイナスはない」「過去へのこだわり」の順に多くみられていた。ここでも、学業達成に成功したことがプラスの影響しかもたない者が28.9%みられるが、それ以上に「内面の変化」に関するマイナスの影響があったことは注目に値する。LS 群については、LF 群と同様、「内面の変化」が最も多く、次いで、「過去へのこだわり」「現在の環境」が多くみられていた。また、「将来・目標」も比較的多く挙げられていることから、学業達成に失敗した群では、過去・現在・未来にわたって、マイナス面の影響がみられることが示された。

次に、現在に対する影響について、プラス面・マイナス面それぞれの内容を詳しく検討するため、下位カテゴリーの出現率を群別に算出した (Table 8 , Table 9)。ただし、設定されたカテゴリー数が多いため、以下では、出現率が10%以上であったものを中心に結果を検討する。

Table 8 : LS/LF 群における現在へのプラスの影響 (下位カテゴリー)

上位カテゴリー	下位カテゴリー	LS 群 201人中(%)	下位カテゴリー	LF 群 71人中(%)
現在の環境	いい結果を得ることができた	29 (14.4)	現在の生活環境がよい	9 (12.7)
	現在の生活環境がよい	29 (14.4)	今の生活が楽しい	8 (11.3)
	今の生活が楽しい	21 (10.4)	いい結果を得ることができた	4 (5.6)
	金銭面で安くついた	4 (2.0)	金銭面で安くついた	2 (2.8)
人との関わり	人とのよい出会いがあった	35 (17.4)	人とのよい出会いがあった	15 (21.1)
	周囲の人から評価されるようになった	5 (2.5)	周囲の人への態度や気持ちがい方へ変わった	2 (2.8)
	周囲の人のありがたみが分かった	3 (1.5)	周囲の人のありがたみが分かった	1 (1.4)
	周囲の人とよい関係を築けた	2 (1.0)	周囲の人から評価されるようになった	0 (0.0)
内面の変化	周囲の人への態度や気持ちがい方へ変わった	2 (1.0)	周囲の人とよい関係を築けた	0 (0.0)
	自信がついた	66 (32.8)	性格・考え方がい方へ変わった	13 (18.3)
	性格・考え方がい方へ変わった	24 (11.9)	やる気がでた	6 (8.5)
	努力の意義を知った	21 (10.4)	努力の意義を知った	4 (5.6)
	新しいことを経験できた・学べた	15 (7.5)	能力の限界・現実の厳しさを知る事ができた	3 (4.2)
	忍耐・努力する力がついた	9 (4.5)	忍耐・努力する力がついた	2 (2.8)
	達成感が得られた	7 (3.5)	新しいことを経験できた・学べた	2 (2.8)
	今の自分の土台になっている	7 (3.5)	自信がついた	1 (1.4)
	精神的に楽になれた	6 (3.0)	精神的に楽になれた	1 (1.4)
	やる気がでた	5 (2.5)	達成感が得られた	0 (0.0)
	能力の限界・現実の厳しさを知る事ができた	3 (1.5)	今の自分の土台になっている	0 (0.0)
	いい思い出ができた	1 (0.5)	いい思い出ができた	0 (0.0)
	スポーツやその競技が好きになった	- (-)	スポーツやその競技が好きになった	- (-)
	体力・運動能力が向上した	- (-)	体力・運動能力が向上した	- (-)
将来・目標	将来の夢に近づけた	12 (6.0)	新しい目標・興味あることが見つかった	6 (8.5)
	自分や将来について考える機会が得られた	7 (3.5)	自分や将来について考える機会が得られた	2 (2.8)
	新しい目標・興味あることが見つかった	7 (3.5)	将来の夢に近づけた	1 (1.4)

Table 9 : LS/LF 群における現在へのマイナスの影響 (下位カテゴリー)

上位カテゴリー	下位カテゴリー	LS 群 201人中(%)	下位カテゴリー	LF 群 71人中(%)
現在の環境	現在の生活環境がよくない	23 (11.4)	現在の生活環境がよくない	10 (14.1)
人との関わり	周囲の人からネガティブな評価を受ける	5 (2.5)	周囲の人との関係にネガティブな影響があった	3 (4.2)
	周囲の人との関係にネガティブな影響があった	5 (2.5)	周囲の人への態度や気持ちが悪い方へ変わった	1 (1.4)
	周囲の人への態度や気持ちが悪い方へ変わった	3 (1.5)	周囲の人からネガティブな評価を受ける	0 (0.0)
内面の変化	性格・考え方が悪い方へ変わった	23 (11.4)	やる気・努力しようという意欲がなくなった	10 (14.1)
	怠惰になった	19 (9.5)	自信がなくなった・劣等感がある	9 (12.7)
	やる気・努力しようという意欲がなくなった	16 (8.0)	性格・考え方が悪い方へ変わった	4 (5.6)
	目標達成後の充実感がない	10 (5.0)	挫折感・辛い気持ちを味わった	4 (5.6)
	過剰な自信をもつことになった	6 (3.0)	辛い時に逃げる癖がついた	2 (2.8)
	なかなか自立できない	4 (2.0)	ネガティブな努力観をもってしまった	2 (2.8)
	自信がなくなった・劣等感がある	2 (1.0)	怠惰になった	1 (1.4)
	ネガティブな努力観をもってしまった	1 (0.5)	なかなか自立できない	1 (1.4)
	挫折感・辛い気持ちを味わった	1 (0.5)	目標達成後の充実感がない	0 (0.0)
	辛い時に逃げる癖がついた	- (-)	過剰な自信をもつことになった	- (-)
	身体を壊した・怪我をした	1 (0.5)	身体を壊した・怪我をした	0 (0.0)
身体面の変化	身体・体型の変化	- (-)	身体・体型の変化	- (-)
将来・目標	目標を見失った	5 (2.5)	将来への不安がある	5 (7.0)
	将来への不安がある	1 (0.5)	目標を見失った	4 (5.6)
過去への こだわり	目標達成のために犠牲にしたものがある	15 (7.5)	やり残した事・やりたかった事への未練がある	18 (25.4)
	他の生き方や可能性があったかもしれない	11 (5.5)	今でも悔いが残っている	7 (9.9)
	やり残した事・やりたかった事への未練がある	2 (1.0)	目標達成のために犠牲にしたものがある	1 (1.4)
	今でも悔いが残っている	1 (0.5)	他の生き方や可能性があったかもしれない	0 (0.0)

プラスの影響に関しては、LS 群においては、「自信がついた」が最も多く、次いで「人とのよい出会いがあった」「いい結果を得ることができた(大学に入ることができた、浪人せずに済んだ、など)」「現在の生活環境がよい」「性格・考え方がい方へ変わった」「今の生活が楽しい」「努力の意義を知った」等の内容が多く挙げられて

いた。一方、LF 群においては、「人とのよい出会いがあった」が最も多く、次いで「性格・考え方がよい方に変わった」「現在の生活環境がよい」「今の生活が楽しい」等が多くみられた内容であった。

マイナスの影響に関しては、LS 群において多くみられたのは、「現在の生活環境がよい」「性格・考え方が悪い方に変わった」であった。その他、「怠惰になった」「やる気・努力しようという意欲がなくなった」という内容が比較的多くみられていることも特徴的である。一方、LF 群においては「やり残した事・やりたかった事への未練がある」が最も多く、次いで、「現在の生活環境がよい」「やる気・努力しようという意欲がなくなった」「自信がなくなった」等の内容が多くみられていた。

学業達成に成功した場合、自分への自信につながったり、思い通りの環境が得られたというプラス面がある反面、結果として得られた生活環境が満足できるものではなかったり、目標が達成できたことで怠惰になったり、努力しようという意欲が無くなってしまおうというマイナス面も持ち合わせていることが示された。逆に、学業領域の目標達成に失敗した場合、そのことに未練をもったり、無力感に陥りやる気を失ってしまったり、自信をなくしてしまうといったマイナス面がある一方で、結果として得られた現在の生活環境や人との出会いが個人にとって満足できるものであったり、個人の性格・考え方がよい方に变化したり、新たな目標が見つかるといったプラス面もみられることが示された。

(b) 未来への影響

現在への影響と同様、学業領域における成功・失敗経験がもたらす未来への影響の有無について、群別に度数を算出した。LF 群では、現在よりも「影響なし」と回答した者が多かったが、両群ともにほとんどの者が「影響あり」と回答していた (Table 10)。また、未来への影響に関する総合的評価について、群別にその度数を算出したところ、現在への影響と同様、LS 群では未来への影響もプラスと評価するものがほとんどであったが、LF 群においても、プラス評価が多数みられることが明らかになった (Figure 6)。

次に、学業達成における成功・失敗経験が未来に及ぼす影響の内容を検討するため、

Table 10 : LS/LF 群における未来への影響の有無

	LS 群	LF 群
影響あり	188 (91.3)	63 (71.6)
影響なし	18 (8.7)	25 (28.4)
合計	206 (100.0)	88 (100.0)

カッコ内は%

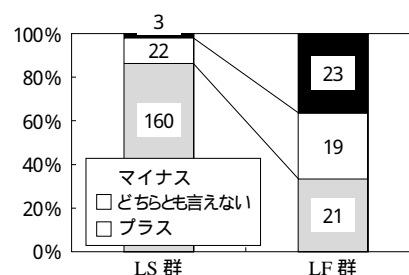


Figure 6 : LS/LF 群における未来への影響の評価 (数値は人数)

Table 11 : LS/LF 群における未来への影響（上位カテゴリー）

プラスの 上位カテゴリー	LS 群 188人中(%)	LF 群 63人中(%)	マイナスの 上位カテゴリー	LS 群 188人中(%)	LF 群 63人中(%)
現在の環境	16 (8.5)	2 (3.2)	現在の環境	10 (5.3)	6 (9.5)
人との関わり	17 (9.0)	5 (7.9)	人との関わり	4 (2.1)	3 (4.8)
内面の変化	74 (39.4)	17 (27.0)	内面の変化	23 (12.2)	9 (14.3)
身体面の変化	0 (0.0)	0 (0.0)	身体面の変化	0 (0.0)	0 (0.0)
将来の進路	103 (54.8)	23 (36.5)	将来の進路	16 (8.5)	21 (33.3)
将来の生活	10 (5.3)	4 (6.3)	将来の自分への不安	22 (11.7)	5 (7.9)
			過去へのこだわり	16 (8.5)	11 (17.5)
その他	3 (1.6)	5 (7.9)	その他	3 (1.6)	4 (6.3)
マイナスはあるがプラスはない	2 (1.1)	12 (19.0)	プラスはあるがマイナスはない	94 (50.0)	8 (12.7)

Table 10で「影響あり」と回答した者を対象として、3・3 .で設定された上位カテゴリーの出現率を算出した（Table 11）。

未来に対するプラスの影響については、両群ともに「将来の進路」や「内面の変化」が多く挙げられており、次いで、LS 群では「人との関わり」、LF 群では「マイナスはあるがプラスはない」が多くみられていた。ここでも、学業達成に失敗したことが未来に対してマイナスの影響しかもたないと思う者が20%近くみられているが、それ以上に「将来の進路」や「内面の変化」に関するプラス評価がみられることは注目すべき結果であろう。

未来に対するマイナスの影響については、LS 群では、「プラスはあるがマイナスはない」が最も多く、次いで「内面の変化」「将来の自分への不安」が多くみられていた。LF 群では、「将来の進路」が最も多く、次いで「過去へのこだわり」「内面の変化」が多くみられていた。LF 群に関しては、プラス面・マイナス面ともに「将来の進路」が未来に最も大きな影響を及ぼすようである。

次に、未来に対する影響について、プラス面・マイナス面それぞれの内容を詳しく検討するため、下位カテゴリーの出現率を群別に算出した（Table 12 , Table 13）。

プラスの影響に関しては、LS 群では「将来の夢に近づけた」「就職に有利に働く」等の将来の進路に関する内容、および、「自信がついた」「忍耐・努力する力がついた」等の内面の変化に関する内容が多くみられていた。一方、LF 群において10%以上の出現率がみられたのは、「将来の選択の幅が広がった」のみであった。LS 群と同様、将来の進路に関する内容が多くみられたとはいえ、その意味合いはLS 群とは異なることが示された。その他、内面の変化に関して、LS 群で比較的多くみられたのは、「忍耐・努力する力がついた」「性格・考え方がよい方に変わった」等であった。

マイナスの影響に関しては、LS 群において出現率が10%以上のものはみられなかったが、比較的多くみられたのは、「将来に不安がある」「他の生き方や可能性があったかもしれない」などの生き方に対する不安であった。一方、LF 群では、「将来に不安がある」「夢をあきらめ方向転換をしなければならない」などの将来の進路に関する記述が最も多く、その他、「やり残したこと・やりたかったことへの未練がある」と

Table 12 : LS/LF 群における未来へのプラスの影響（下位カテゴリー）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	LS 群 188人中(%)	下位カテゴリー	LF 群 63人中(%)
現在の環境	現在のよい環境が得られた	16 (8.5)	現在のよい環境が得られた	1 (1.6)
人との関わり	人とのよい出会いがあった	6 (3.2)	周囲の人への態度や気持ちがい方に変わった	3 (4.8)
	様々な人に出会える	5 (2.7)	人とのよい出会いがあった	2 (3.2)
	周囲の人とのよい関係を続けている	3 (1.6)	周囲の人とのよい関係を続けている	0 (0.0)
	周囲の人への態度や気持ちがい方に変わった	3 (1.6)	様々な人に出会える	0 (0.0)
内面の変化	自信がついた	24 (12.8)	忍耐・努力する力がついた	5 (7.9)
	忍耐・努力する力がついた	20 (10.6)	性格・考え方がい方に変わった	5 (7.9)
	新しいことが経験できた・学べた	14 (7.4)	新しいことが経験できた・学べた	4 (6.3)
	性格・考え方がい方に変わった	12 (6.4)	やる気がでた	4 (6.3)
	努力の意義を知った	9 (4.8)	自信がついた	1 (1.6)
	やる気がでた	1 (0.5)	努力の意義を知った	1 (1.6)
	いい思い出ができた	- (-)	いい思い出ができた	- (-)
身体面の変化	健康・体力を得た	- (-)	健康・体力を得た	- (-)
将来の進路	将来の夢に近づけた	34 (18.1)	将来の選択の幅が広がった	11 (17.5)
	就職に有利に働く	27 (14.4)	新しい目標・興味あることが見つかった	5 (7.9)
	将来のための準備・役に立つ経験ができる	18 (9.6)	将来の見通しができた	3 (4.8)
	学歴・資格を得ることができた	15 (8.0)	学歴・資格を得ることができた	2 (3.2)
	将来の見通しができた	8 (4.3)	就職に有利に働く	1 (1.6)
	将来の選択の幅が広がった	6 (3.2)	将来の夢に近づけた	1 (1.6)
	新しい目標・興味あることが見つかった	- (-)	将来のための準備・役に立つ経験ができる	- (-)
将来の生活	これから新たなことが学べる・経験できる	7 (3.7)	これから新たなことが学べる・経験できる	2 (3.2)
	将来楽しい生活ができる	2 (1.1)	将来楽しい生活ができる	2 (3.2)
	これからも続けていける趣味ができた	1 (0.5)	これからも続けていける趣味ができた	0 (0.0)

Table 13 : LS/LF 群における未来へのマイナスの影響（下位カテゴリー）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	LS 群 188人中(%)	下位カテゴリー	LF 群 63人中(%)
現在の環境	現在の環境に不満がある	10 (5.3)	現在の環境に不満がある	6 (9.5)
人との関わり	周囲の人からネガティブな評価を受ける	3 (1.6)	周囲の人からネガティブな評価を受ける	2 (3.2)
	対人関係に不安がある	1 (0.5)	対人関係に不安がある	1 (1.6)
内面の変化	性格・考え方が悪い方に変わった	12 (6.4)	やる気・努力しようという意欲がなくなった	5 (7.9)
	過剰な自信をもつようになった	7 (3.7)	自信がなくなった・劣等感がある	4 (6.3)
	目標達成後の状態に不満がある	3 (1.6)	過剰な自信をもつようになった	0 (0.0)
	やる気・努力しようという意欲がなくなった	1 (0.5)	目標達成後の状態に不満がある	0 (0.0)
	自信がなくなった・劣等感がある	- (-)	性格・考え方が悪い方に変わった	- (-)
身体面の変化	身体・体型の変化	- (-)	身体・体型の変化	- (-)
	身体の不調・けが・身の危険	- (-)	身体の不調・けが・身の危険	- (-)
将来の進路	将来に不安がある	16 (8.5)	将来に不安がある	12 (19.0)
	夢をあきらめ方向転換をしなければならない	0 (0.0)	夢をあきらめ方向転換をしなければならない	10 (15.9)
将来の自分 への不安	自分の未熟さに対する不安がある	12 (6.4)	新たな目標の達成に不安がある	4 (6.3)
	新たな目標の達成に不安がある	6 (3.2)	自分の未熟さに対する不安がある	1 (1.6)
	人の意見にながされた生き方をしそう	4 (2.1)	人の意見にながされた生き方をしそう	0 (0.0)
過去への こだわり	他の生き方や可能性があったかもしれない	14 (7.4)	やり残した事・やりたかった事への未練がある	8 (12.7)
	やり残した事・やりたかった事への未練がある	2 (1.1)	他の生き方や可能性があったかもしれない	2 (3.2)
	辛い思い出ができた	0 (0.0)	辛い思い出ができた	1 (1.6)

いう内容も多くみられていた。

学業達成に成功した場合、最も大きな影響は、将来の進路に関するプラスの影響であり、未来へのマイナス面での影響はそれほどみられないことが示された。逆に、学業達成に失敗した場合、将来の進路に不安を抱いたり、方向転換を余儀なくされたりするといったマイナス面がある反面、失敗したことによって、将来の選択の幅が広がったり、忍耐力がつくなどのプラス面もみられることが明らかになった。

(2) スポーツ領域における成功・失敗経験が現在・未来にもたらす影響

学業と同様、過去に目指していた目標の中で、スポーツ領域の目標を挙げた者を抽出し、その目標について「達成できた」「ある程度達成できた」と回答した者を成功(SS)群、「達成できなかった」「あまり達成できなかった」と回答した者を失敗(SF)群とした。

(a) 現在への影響

スポーツ領域における成功・失敗経験がもつ現在への影響の有無について、群別に度数を算出したところ、Table 14のようになった。学業領域と比べて、両群ともに「影響なし」と回答した者が多く、その傾向は、特にSF群において顕著であった。また、現在への影響に関する総合的評価について、群別にその度数を算出したところ、学業領域とは異なり、成功・失敗に関わらず、ほとんどの者が総合的にプラスと評価していることが明らかになった(Figure 7)。

次に、スポーツ領域における成功・失敗経験が現在に及ぼす影響の内容を検討するため、Table 14において「影響あり」と回答した者のうち、成功・失敗群別に上位カテゴリーの出現率を算出した(Table 15)。

現在に対するプラスの影響については、両群ともに「内面の变化」を挙げた者が最も多く、いずれも出現率が全体の3/4以上であった。次いで多くみられたのは、SS群では、「人との関わり」「身体面の变化」であり、SF群では、「人との関わり」「将来・目標」であった。スポーツ達成に失敗した場合、学業とは異なりマイナスの影響しかもたない者がほとんどみられないことが特徴的である。

Table 14 : SS/SF 群における現在への影響の有無

	SS 群	SF 群
影響あり	76 (87.4)	38 (65.5)
影響なし	11 (12.6)	20 (34.5)
合計	87 (100.0)	58 (100.0)

カッコ内は%

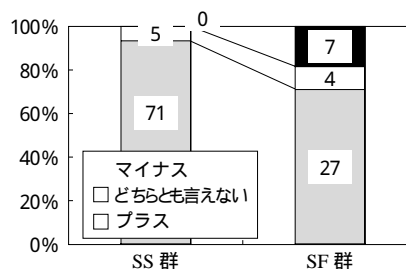


Figure 7 : SS/SF 群における現在への影響の評価 (数値は人数)

Table 15 : SS/SF 群における現在への影響 (上位カテゴリー)

プラスの 上位カテゴリー	SS 群 76人中(%)	SF 群 38人中(%)	マイナスの 上位カテゴリー	SS 群 76人中(%)	SF 群 38人中(%)
現在の環境	4 (5.3)	0 (0.0)	現在の環境	1 (1.3)	0 (0.0)
人との関わり	19 (25.0)	5 (13.2)	人との関わり	8 (10.5)	1 (2.6)
内面の变化	68 (89.5)	29 (76.3)	内面の变化	17 (22.4)	18 (47.4)
身体面の变化	8 (10.5)	0 (0.0)	身体面の变化	10 (13.2)	1 (2.6)
将来・目標	1 (1.3)	4 (10.5)	将来・目標	0 (0.0)	2 (5.3)
過去へのこだわり			過去へのこだわり	9 (11.8)	11 (28.9)
その他	1 (1.3)	1 (2.6)	その他	0 (0.0)	1 (2.6)
マイナスはあるがプラスはない	0 (0.0)	2 (5.3)	プラスはあるがマイナスはない	35 (46.1)	9 (23.7)

現在に対するマイナスの影響については、SS 群では、「プラスはあるがマイナスはない」が最も多く、次いで、「内面の変化」「身体面の変化」であった。SF 群では、「内面の変化」が最も多く、次いで「過去へのこだわり」「プラスはあるがマイナスはない」であった。スポーツ達成に失敗したにも関わらず、現在にプラスの影響しかもたないと回答した者が多くみられ、スポーツに関しては、学業以上にプラス面での影響が大きい傾向が示された。

次に、現在への影響について、プラス面・マイナス面それぞれの内容を詳しく検討するため、下位カテゴリーの出現率を群別に算出した (Table 16, Table 17)。学業領域と同様、以下では10%以上の出現率がみられたものを中心に検討する。

現在に対するプラスの影響に関しては、SS 群では、「自信がついた」が最も多く、次いで「忍耐・努力する力がついた」「努力の意義を知った」「性格・考え方がよい方に変わった」等、内面の変化に言及したものがほとんどであった。また、スポーツを通して「周囲の人とよい関係を築けた」という記述も比較的多くみられていた。一方、SF 群では、「努力の意義を知った」「忍耐・努力する力がついた」「性格・考え方がよい方に変わった」という内面の変化に言及したもののほか、「新しい目標・興味あることが見つかった」という記述もみられていた。浦田(1989; 1999)では、スポーツを行う中で、成績における目標達成経験や喜び経験の多い者ほど、自己概念がポジティブであり自尊感情も高いという傾向が示されているが、本研究においては、スポーツにおいて失敗したとしても、個人の内面にプラスの影響をもたらす場合があることが

Table 16 : SS/SF 群における現在へのプラスの影響 (下位カテゴリー)

上 位 カテゴリー	下位カテゴリー	SS 群 76人中(%)	下位カテゴリー	SF 群 38人中(%)
現在の環境	今の生活が楽しい	2 (2.6)	いい結果を得ることができた	0 (0.0)
	いい結果を得ることができた	1 (1.3)	今の生活が楽しい	0 (0.0)
	現在の生活環境がよい	1 (1.3)	現在の生活環境がよい	0 (0.0)
	金銭面で安くついた	- (-)	金銭面で安くついた	- (-)
人との関わり	周囲の人とよい関係を築けた	11 (14.5)	周囲の人とよい関係を築けた	2 (5.3)
	人とのよい出会いがあった	3 (3.9)	人とのよい出会いがあった	1 (2.6)
	周囲の人のありがたみが分かった	3 (3.9)	周囲の人のありがたみが分かった	1 (2.6)
	周囲の人から評価されるようになった	2 (2.6)	周囲の人への態度や気持ちがよい方に変わった	1 (2.6)
内面の変化	周囲の人への態度や気持ちがよい方に変わった	1 (1.3)	周囲の人から評価されるようになった	0 (0.0)
	自信がついた	28 (36.8)	努力の意義を知った	13 (34.2)
	忍耐・努力する力がついた	21 (27.6)	忍耐・努力する力がついた	7 (18.4)
	努力の意義を知った	16 (21.1)	性格・考え方がよい方に変わった	5 (13.2)
	性格・考え方がよい方に変わった	11 (14.5)	自信がついた	2 (5.3)
	スポーツやその競技が好きになった	6 (7.9)	新しいことを経験できた・学べた	2 (5.3)
	やる気がでた	5 (6.6)	今の自分の土台になっている	2 (5.3)
	新しいことを経験できた・学べた	4 (5.3)	能力の限界・現実の厳しさを知る事ができた	2 (5.3)
	いい思い出ができた	3 (3.9)	やる気がでた	2 (5.3)
	達成感が得られた	2 (2.6)	いい思い出ができた	2 (5.3)
	能力の限界・現実の厳しさを知る事ができた	2 (2.6)	精神的に楽になれた	1 (2.6)
	今の自分の土台になっている	1 (1.3)	達成感が得られた	0 (0.0)
	精神的に楽になれた	1 (1.3)	スポーツやその競技が好きになった	0 (0.0)
身体面の変化	体力・運動能力が向上した	8 (10.5)	体力・運動能力が向上した	0 (0.0)
将来・目標	新しい目標・興味あることが見つかった	1 (1.3)	新しい目標・興味あることが見つかった	4 (10.5)
	自分や将来について考える機会が得られた	- (-)	自分や将来について考える機会が得られた	- (-)
	将来の夢に近づけた	- (-)	将来の夢に近づけた	- (-)

Table 17：SS/SF 群における現在へのマイナスの影響（下位カテゴリー）

上 位 カテゴリー	下位カテゴリー	SS 群 76人中(%)	下位カテゴリー	SF 群 38人中(%)
現在の環境	現在の生活環境がよくない	1 (1.3)	現在の生活環境がよくない	0 (0.0)
人との関わり	周囲の人との関係にネガティブな影響があった	4 (5.3)	周囲の人からネガティブな評価を受ける	1 (2.6)
	周囲の人への態度や気持ちが悪い方に変った	3 (3.9)	周囲の人との関係にネガティブな影響があった	0 (0.0)
	周囲の人からネガティブな評価を受ける	1 (1.3)	周囲の人への態度や気持ちが悪い方に変った	0 (0.0)
内面の変化	性格・考え方が悪い方に変った	7 (9.2)	挫折感・辛い気持ちを味わった	7 (18.4)
	自信がなくなった・劣等感がある	3 (3.9)	ネガティブな努力観をもってしまった	4 (10.5)
	過剰な自信をもつことになった	2 (2.6)	性格・考え方が悪い方に変った	4 (10.5)
	ネガティブな努力観をもってしまった	2 (2.6)	辛い時に逃げる癖がついた	3 (7.9)
	怠惰になった	1 (1.3)	自信がなくなった・劣等感がある	2 (5.3)
	目標達成後の充実感がない	1 (1.3)	怠惰になった	1 (2.6)
	やる気・努力しようという意欲がなくなった	1 (1.3)	目標達成後の充実感がない	0 (0.0)
	挫折感・辛い気持ちを味わった	1 (1.3)	過剰な自信をもつことになった	0 (0.0)
	辛い時に逃げる癖がついた	- (-)	やる気・努力しようという意欲がなくなった	- (-)
	なかなか自立できない	- (-)	なかなか自立できない	- (-)
身体面の変化	身体を壊した・怪我をした	6 (7.9)	身体を壊した・怪我をした	1 (2.6)
	身体・体型の変化	5 (6.6)	身体・体型の変化	0 (0.0)
将来・目標	将来への不安がある	0 (0.0)	将来への不安がある	1 (2.6)
	目標を見失った	0 (0.0)	目標を見失った	1 (2.6)
過去への こだわり	今でも悔いが残っている	3 (3.9)	今でも悔いが残っている	6 (15.8)
	目標達成のために犠牲にしたものがある	5 (6.6)	やり残した事・やりたかった事への未練がある	4 (10.5)
	やり残した事・やりたかった事への未練がある	1 (1.3)	目標達成のために犠牲にしたものがある	1 (2.6)
	他の生き方や可能性があったかもしれない	- (-)	他の生き方や可能性があったかもしれない	- (-)

示された。

現在に対するマイナスの影響に関しては、SS 群においては、マイナスの影響がないと回答した者が多かったため、それほど特徴的な内容はみられなかった。比較的多くみられたのは「性格・考え方が悪い方に変った」であった。一方、SF 群においては、度数は少ないものの、「挫折感・辛い気持ちを味わった」「今でも悔いが残っている」のほか、「ネガティブな努力観をもってしまった」「性格・考え方が悪い方に変った」「やり残した事・やりたかった事への未練がある」等の内容が比較的多くみられていた。スポーツ達成に成功した場合と比較すると、スポーツ達成に失敗した場合、過去へのこだわりが強くみられる傾向が示された。

(b) 未来への影響

現在への影響と同様、スポーツ領域における成功・失敗経験がもたらす未来への影響の有無について群別に度数を算出した。現在への影響と比較して、未来への影響がないと回答した者が多かったが、その傾向は SF 群において特に顕著であった（Table 18）。また、未来への影響に関する総合的評価について、群別にその度数を算出したところ、現在への影響と同様、成功・失敗に関わらず、ほとんどの者が総合的にプラスと評価していることが明らかになった（Figure 8）。

次に、スポーツ領域における成功・失敗経験が未来にもたらす影響の内容を検討するため、Table 18 で「影響あり」と回答した者を対象として、3.3. で設定された上位カテゴリーの出現率を算出した（Table 19）。

未来に対するプラスの影響については、両群ともに「内面の変化」が最も多く挙げられており、次いで、SS 群では「人との関わり」「将来の生活」、SF 群では「マイナ

Table 18 : SS/SF 群における未来への影響の有無

	SS 群	SF 群
影響あり	64 (76.2)	30 (50.8)
影響なし	20 (23.8)	29 (49.2)
合計	84 (100.0)	59 (100.0)

カッコ内は%

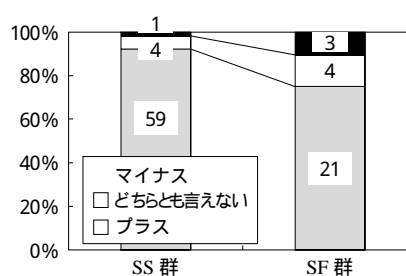


Figure 8 : SS/SF 群における未来への影響の評価 (数値は人数)

Table 19 : SS/SF 群における未来への影響 (上位カテゴリー)

カテゴリー名	SS 群 64人中(%)	SF 群 29人中(%)	カテゴリー名	SS 群 64人中(%)	SF 群 29人中(%)
現在の環境	0 (0.0)	0 (0.0)	現在の環境	0 (0.0)	0 (0.0)
人との関わり	7 (10.9)	3 (10.3)	人との関わり	4 (6.3)	0 (0.0)
内面の変化	50 (78.1)	21 (72.4)	内面の変化	7 (10.9)	7 (24.1)
身体面の変化	3 (4.7)	0 (0.0)	身体面の変化	7 (10.9)	1 (3.4)
将来の進路	4 (6.3)	0 (0.0)	将来の進路	0 (0.0)	1 (3.4)
将来の生活	6 (9.4)	2 (6.9)	将来の自分への不安	3 (4.7)	3 (10.3)
その他	2 (3.1)	0 (0.0)	過去へのこだわり	1 (1.6)	6 (20.7)
マイナスはあるがプラスはない	1 (1.6)	4 (13.8)	その他	1 (1.6)	0 (0.0)
			プラスはあるがマイナスはない	41 (64.1)	14 (48.3)

スはあるがプラスはない」「人との関わり」が多くみられていた。スポーツ達成に失敗したことが未来に対してマイナスの影響しかもたないと回答した者が13.8%みられたが、それ以上に「内面の変化」に関するプラスの影響が顕著であった。

未来に対するマイナスの影響については、両群ともに、「プラスはあるがマイナスはない」が最も多く、次いで多くみられたのは、SS 群では「内面の変化」「身体面の変化」、SF 群では「内面の変化」「過去へのこだわり」であった。スポーツに関しては、成功・失敗に関わらず、現在への影響と同様、未来に対してもプラスの影響が大きいようである。

次に、未来への影響について、プラス面・マイナス面それぞれの内容を詳しく検討するため、下位カテゴリーの出現率を群別に算出した (Table 20, Table 21)。

未来に対するプラスの影響について出現率が10%以上のものをみると、SS 群においては「忍耐・努力する力がついた」「自信がついた」等、内面の変化に言及したものが中心であった。SF 群においても、「忍耐・努力する力がついた」「性格・考え方がよい方へ変わった」「いい思い出ができた」等、内面の変化に関する内容が多くみられていた。

未来に対するマイナスの影響について出現率が10%以上であったのは、SS 群では、「性格・考え方が悪い方へ変わった」のみであり、他に特徴的な内容はみられなかった。一方、度数は少ないものの、SF 群において最も多くみられたのは、「やる気・努

Table 20：SS/SF 群における未来へのプラスの影響（下位カテゴリー）

上 位 カテゴリー	下位カテゴリー	SS 群 64人中(%)	下位カテゴリー	SF 群 29人中(%)
現在の環境	現在のよい環境が得られた	- (-)	現在のよい環境が得られた	- (-)
人との関わり	周囲の人とのよい環境を続けている	4 (6.3)	周囲の人とのよい環境を続けている	1 (3.4)
	周囲の人への態度や気持ちがいよ方に変わった	1 (1.6)	周囲の人への態度や気持ちがいよ方に変わった	1 (3.4)
	人とのよい出会いがあった	1 (1.6)	人とのよい出会いがあった	1 (3.4)
	様々な人に出会える	1 (1.6)	様々な人に出会える	0 (0.0)
内面の変化	忍耐・努力する力がついた	26 (40.6)	忍耐・努力する力がついた	8 (27.6)
	自信がついた	15 (23.4)	性格・考え方がいよ方に変わった	5 (17.2)
	性格・考え方がいよ方に変わった	6 (9.4)	いい思い出ができた	4 (13.8)
	努力の意義を知った	4 (6.3)	新しいことを経験できた・学べた	2 (6.9)
	やる気がでた	4 (6.3)	努力の意義を知った	2 (6.9)
	新しいことを経験できた・学べた	3 (4.7)	自信がついた	0 (0.0)
	いい思い出ができた	- (-)	やる気がでた	- (-)
身体面の変化	健康・体力を得た	3 (4.7)	健康・体力を得た	0 (0.0)
将来の進路	将来のための準備・役に立つ経験ができる	4 (6.3)	将来のための準備・役に立つ経験ができる	0 (0.0)
	就職に有利に働く	- (-)	就職に有利に働く	- (-)
	将来の見通しができた	- (-)	将来の見通しができた	- (-)
	将来の夢に近づけた	- (-)	将来の夢に近づけた	- (-)
	学歴・資格を得ることができた	- (-)	学歴・資格を得ることができた	- (-)
	将来の選択の幅が広がった	- (-)	将来の選択の幅が広がった	- (-)
	新しい目標・興味あることが見つかった	- (-)	新しい目標・興味あることが見つかった	- (-)
将来の生活	これからも続けていける趣味ができた	5 (7.8)	これからも続けていける趣味ができた	2 (6.9)
	将来楽しい生活ができる	3 (4.7)	将来楽しい生活ができる	0 (0.0)
	これから新たなことが学べる・経験できる	- (-)	これから新たなことが学べる・経験できる	- (-)

Table 21：SS/SF 群における未来へのマイナスの影響（下位カテゴリー）

上 位 カテゴリー	下位カテゴリー	SS 群 64人中(%)	下位カテゴリー	SF 群 29人中(%)
現在の環境	現在の環境に不満がある	- (-)	現在の環境に不満がある	- (-)
人との関わり	対人関係に不安がある	4 (6.3)	対人関係に不安がある	0 (0.0)
	周囲の人からネガティブな評価を受ける	- (-)	周囲の人からネガティブな評価を受ける	- (-)
内面の変化	性格・考え方が悪い方に変わった	7 (10.9)	やる気・努力しようという意欲がなくなった	3 (10.3)
	やる気・努力しようという意欲がなくなった	0 (0.0)	性格・考え方が悪い方に変わった	2 (6.9)
	自信がなくなった・劣等感がある	0 (0.0)	自信がなくなった・劣等感がある	1 (3.4)
	目標達成後の状態に不満がある	0 (0.0)	目標達成後の状態に不満がある	1 (3.4)
	過剰な自信をもつようになった	- (-)	過剰な自信をもつようになった	- (-)
身体面の変化	身体の不調・けが・身の危険	4 (6.3)	身体の不調・けが・身の危険	1 (3.4)
	身体・体型の変化	3 (4.7)	身体・体型の変化	0 (0.0)
将来の進路	将来の進路に不安がある	0 (0.0)	将来に不安がある	1 (3.4)
	夢をあきらめ方向転換をしなければならない	- (-)	夢をあきらめ方向転換をしなければならない	- (-)
将来の自分	新たな目標の達成に不安がある	3 (4.7)	新たな目標の達成に不安がある	3 (10.3)
	人の意見にながされた生き方をしそう	- (-)	人の意見にながされた生き方をしそう	- (-)
	自分の未熟さに対する不安がある	- (-)	自分の未熟さに対する不安がある	- (-)
過去への こだわり	辛い思い出ができた	1 (1.6)	やり残した事・やりたかった事への未練がある	4 (6.8)
	やり残した事・やりたかった事への未練がある	0 (0.0)	辛い思い出ができた	2 (6.9)
	他の生き方や可能性があったかもしれない	- (-)	他の生き方や可能性があったかもしれない	- (-)

力しようという意欲がなくなった」「新たな目標の達成に不安がある」であった。両群ともに、マイナスの影響が比較的少ないため、それほど特徴的な内容はみられず、学業領域と比較して、スポーツ領域における成功・失敗経験が未来にもたらす影響はそれほど大きくはないようである。

4．全体的考察

本研究では、過去のポジティブ・ネガティブ経験が個人の現在や未来に対してどのような影響をもつか、ということに焦点をあて、両者の関係とその質的意味について検討した。過去のポジティブ・ネガティブ経験を捉える際には、それらが個人にとって意味があると認識されていることを考慮すべきであると考え、個人が過去に達成を志向していた目標を自由に挙げてもらい、それに対する成功・失敗の程度について評価を求めた。このようにして捉えられた成功・失敗経験を用いて、現在・未来への影響との関連を検討したところ、全体としては、成功経験は現在や未来にプラスの影響をもち、失敗経験はマイナスの影響をもつ傾向が示されたものの、両者の関係はそれほど単純なものではなく、失敗経験が現在や未来にプラスの影響をもつ場合や、また、少数ではあるが、成功経験が現在や未来にマイナスの影響をもつ場合があるなど、成功・失敗経験は個人によって多様な意味づけをもつことが明らかになった。

現在・未来への具体的な影響の内容については、何に対する成功・失敗経験であるかによって影響の内容が異なってくることを考慮し、過去に達成を目指した目標として最も多く挙げられた学業領域とスポーツ領域とを取り上げた。

これまで、学業やスポーツにおける過去の成功・失敗経験がその後の自尊心や動機づけを左右することは多数指摘されており、試験において成績が下降した生徒は自尊感情が否定的な方向に変化することや（瀧野・斉藤，1991）、学業やスポーツにおける「成功感の経験」が現在の達成動機と密接に関連すること（阿部・宮下，1988）、また、そうした自伝的記憶が現在の行動を動機づける機能をもっていること（速水・陳，1993）などが報告されている。本研究においても、学業領域やスポーツ領域における成功群では「自信がついた」「努力の意義を知った」「忍耐・努力する力がついた」という記述が多くみられたのに対し、失敗群では、「自信がなくなった・劣等感がある」「挫折感・辛い気持ちを味わった」などの記述が多くみられ、先行研究と同様の傾向が示された。しかしその一方で、成功群において「性格・考え方が悪い方に変わった」「怠惰になった」というネガティブな記述がみられたり、失敗群においても「性格・考え方がよい方に変わった」「忍耐・努力する力がついた」というポジティブな記述がみられるなど、成功経験が必ずしもプラスの影響をもち、失敗経験が必ずしもネガティブな影響をもつとは限らないことが明らかになった。本研究では、現在や未来への影響について、成功・失敗による影響の方向性をあらかじめ限定せず、プラス・マイナス両面に関する記述を求めたが、そのことによって、過去の成功・失敗経験に含まれる多様な意味づけを得ることに成功したといえよう。

また、それぞれの領域に関して影響の内容を検討したところ、スポーツ達成と比較して、学業達成の方が個人の現在や未来に対する影響が大きいことが明らかになった。学業領域において成功した場合、その中心的内容が受験であったこともあり、よい環境が

得られたり、自信につながったり、将来の進路に有利に働く、といった面でプラスの影響を挙げる者が多い反面、自信をもって思い上がったたり、怠惰な生活を送ったりするというマイナス面を挙げる者も目立ち、学業領域での成功は両刃の剣的印象が強い。また、学業領域で失敗した場合、無力感に陥りやる気を失ってしまったり、自信をなくしてしまったり、自分の生き方に関する深刻な悩みをもつ者が多い反面、自分に対する過剰な自信が軽減されるなど、性格や考え方がよい方に变化したり、将来の選択の幅が広がったりするなど、失敗経験をポジティブに捉える者もかなり多くみられていた。一方、スポーツ達成は学業達成よりも単純で、成功しても失敗しても、自信や忍耐力がついたり、努力の意義を学んだなど、内面の変化をプラス面として挙げる者が多く、マイナス面はみあたらないと回答する者も多くみられた。このように、本研究では、成功・失敗のみではなく、経験した出来事の内容によっても、影響の質が異なることが示された。ライフイベント研究では、学業やクラブ・サークル、友人関係など、多様な領域が尺度の中に含まれていたとはいえ、領域の質的な違いはほとんど扱われてこなかったが、本研究の結果は、経験の内容についても考慮する必要性を示唆するものであろう。

わが国における従来のライフイベント研究では、その尺度内容をみても明らかなように、ネガティブなイベントに重点がおかれており、ポジティブなイベントは積極的には扱われてこなかった。しかし、本研究では、成功経験によって、失敗経験とは質的に異なるプラスの影響がみられたり、逆に、それほど顕著ではなかったものの、成功経験による現在・未来へのネガティブな影響がみられることも明らかになった。また、ネガティブ経験とされる失敗経験に関しては、単にそれがマイナスに作用しないだけでなく、学びや内面の変化など、個人の成長に結びつくような積極的な意味づけがなされることも明らかになった。ライフイベント研究では、過去の経験が現在にもたらす影響として、どの程度のストレス量がもたらされるかを予測したり、逆にストレス量をどれだけ抑えられるか、というストレス反応の生起に焦点があてられてきたが、ポジティブなライフイベントのもつ意味や、ネガティブなイベントを乗り越えたことによるプラスの影響など、ライフイベントを経験することの積極的な意味についても検討されるべきであろう。

以上に検討してきたように、本研究では、過去の成功・失敗経験が個人にもたらす影響について、多様な意味づけの存在を示してきたわけであるが、今後の課題として、失敗経験がマイナスの影響しかもたなかった者とプラスの影響に転じた者との違いがどこにあるのか、その要因を探ると同時に、失敗経験がどのようにしてプラスに転じ、成功経験がどのようにしてマイナスに転じたのかというメカニズムを解明する必要がある。近年、ストレス研究やライフイベント研究では、ストレスフルなイベントの経験の有無のみでなく、対処行動やソーシャル・サポートによってストレス反応に違いがみられるということが明らかにされつつある (Lee & Larson, 1996; 尾関・原口・津田, 1994)。また、本研究では、個人の目標達成について、被調査者に現時点から過去を振り返って回答を求める方法をとっているが、適応的なパーソナリティの者は、不快な個人的経験

の記憶に対して、認識がポジティブに変化しているなど、パーソナリティ特性の差異によって自伝的記憶の想起に違いがみられることが明らかにされている（神谷・伊藤，2000）。同じネガティブな出来事を経験しても、それをポジティブな影響に転じることができる者とそうでない者との間には、対処行動のような出来事に対する取り組み方や、個人のパーソナリティに違いがみられるのかもしれない。あるいは、継時的なデータ収集によって実際の変容プロセスを明らかにしていくといった方法も導入する必要があるだろう。これらの課題をふまえ、過去の経験が個人の人生にもたらす影響について、今後も更なる検討を重ねていきたいと考えている。

注

- 1) 本研究において、成功・失敗の判断を被調査者自身にゆだねたのは、客観的な成功・失敗経験ではなく、個人が成功・失敗と意味づける経験を扱おうとしたためである。島（1980）では、女子短期大学1年生を対象として、4年制大学に合格できなかったことを失敗条件、短期大学に合格できたことを成功条件として帰属様式の検討がなされているが、こうした方法では真の成功・失敗条件が扱えなかったと考察されている。よって、失敗・成功経験は、被調査者本人の判断によって得る必要があると考えた。
- 2) 3・1と同様、1人あたり1個の目標をランダム抽出し、同様の分析を試みたが、結果に違いがみられなかったことから、以下では、860個の目標を対象として分析を進めることにする。
- 3) この中には、学業とスポーツ両方の目標を挙げた者が82名含まれているが、本稿では、それぞれの領域における成功・失敗経験の影響を捉えることを目的としているため、以下では、どちらか一方の目標しか挙げなかった者と、両方の目標を挙げた者とを区別せずに分析する。

文 献

- 阿部信弘・宮下一博 1988 中学生における達成動機と過去の諸経験との関係 千葉大学教育学部研究紀要, 36, 101 - 106.
- Crandall, C. S., Preisler, J. J., & Aussprung, J. 1992 Measuring life event stress in the lives of college students: The Undergraduate Stress Questionnaire(USQ) *Journal of Behavioral Medicine*, 15(6), 627 - 662.
- 速水敏彦・陳恵貞 1993 動機づけ機能としての自伝的記憶 感動体験の分析から 名古屋大学教育学部紀要, 40, 89 - 98.
- 久田満・丹羽郁夫 1990 大学生の生活ストレス測定に関する研究 大学生用生活体験尺度の作成 慶応大学社会学研究科紀要, 27, 45 - 55.
- 平川(上野)淳子・尾崎仁美 2000 達成動機研究における方法論の検討と課題 大阪大学教育学年報, 5, 85 - 98.
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213 - 218.
- 神谷俊次・伊藤美奈子 2000 自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析 心理学研究, 71(2), 96 -

104.

- Lahey, B. & Ross, L. T. 1994 Dependency and self-criticism as moderators of interpersonal and achievement stress: The role of initial dysphoria. *Cognitive Therapy and Research*, 18(6), 581 - 599.
- Lee, M. & Larson, R. 1996 Effectiveness of coping in adolescence: The case of Korean examination stress. *International Journal of Behavioral Development*, 19(4), 851 - 869.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551 - 558.
- Marcia, J. E. 1967 Ego identity status: Relationship to change in self esteem, "general maladjustment", and authoritarianism. *Journal of Personality*, 35, 118 - 133.
- 尾関友佳子 1990 大学生のストレス自己評価尺度 質問紙構成と質問紙短縮について 久留米大学大学院比較文化研究, 1, 9 - 24.
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂 トランスアクション分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95 - 114.
- 尾関友佳子・原口雅治・津田彰 1991 大学生の生活ストレス、コーピング、パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究, 4, 1 - 9.
- 尾関友佳子・原口雅治・津田彰 1994 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 健康心理学研究, 7, 20 - 36.
- Robins, C. J., & Block, P. 1988 Personality vulnerability, life events, and depressive symptoms: A test of specific interactional model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 847 - 852.
- Rogers, C. R. 1951 *Client centered therapy: Its current practice, implications and therapy*. Boston: Houghton Mifflin. (友田不二男編訳『ロージャス全集3:サイコセラピー』岩崎学術出版社, 1966)
- Sarason, E. G., Johnson, J. H., & Siegel, J. M. 1978 Assessing the impact of life changes: development of the life experiences survey. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46(5), 932 - 946.
- Segal, Z. V., Shaw, B. F., Vella, D. D., & Katz, R. 1992 Cognitive and life stress predictor of relapse in remitted unipolar depressed patients: Test of the congruency hypothesis. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 26 - 36.
- 島久洋 1980 大学入学試験における成功・失敗の因果帰着過程 武庫川女子大学紀要(文学部編・教育学科), 28, 21 - 26.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生用)の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12 - 24.
- 高村和代 1997 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究, 45, 243 - 253.
- 瀧野揚三・齋藤誠一 1991 青少年の self-esteem の特質とその規定要因 学業成績との関連の検討 大阪教育大学紀要第 部門, 40, 13 - 19.
- 上野淳子 2001 努力とは何か? 努力動機の観点から 大阪大学教育学年報, 6(印刷中)
- 浦上昌則 1996 就職活動を通しての自己成長 女子短大生の場合 教育心理学研究, 44, 400 - 409.
- 浦田清 1989 運動の場における喜び経験が自己概念に及ぼす影響について 北海道体育学研究, 24, 13 - 18.
- 浦田清 1999 運動の成績目標達成経験と熟達目標達成経験が自己概念の形成に及ぼす影響について 函館工業高等専門学校紀要, 33, 107 - 110.
- 和田実・鄭曉齊・郭小蘭 1993 日本と中国の大学生のストレスとその対処行動 東京学芸大学紀要(1部門), 44, 247 - 262.

The Impact of Successful or Unsuccessful Past Experiences : Relationship with Present and Future

Hitomi OZAKI and Junko UENO

This study examined the relationship between past experiences and present/future life. 475 Japanese undergraduate students participated and they were asked to name any goal that they wanted to achieve in the past. Then they evaluated how successful the result was, and its impact on present and future life.

Although correlation analysis showed that past successful experiences have a positive impact, and past unsuccessful experiences have a negative impact on their life, detailed analysis showed that unsuccessful experience could have a positive impact, and successful experience could have a negative impact for some participants.

Therefore the past achievement goals were categorized according to its context, and academic and sports related experiences were selected for further analysis. By comparing the impact of success and failure in the same category (intra-category), and the impact of success/failure in academic field and in sports related field (inter-category), the result showed that there is a qualitative difference in the meaning of success and failure depending on the category of achievement goal.